

対応・英抄なし

Ref1

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開実用新案公報 (U)

(11) 実用新案出願公開番号

実開平7-37332

(43) 公開日 平成7年(1995)7月11日

(51) Int.Cl.<sup>6</sup>

識別記号

片内整理番号

F I

技術表示箇所

B 0 1 L 3/14

G 0 1 N 33/68

審査請求 未請求 請求項の数1 書面 (全 2 頁)

(21) 出願番号 実願平5-76267

(22) 出願日 平成5年(1993)12月24日

(71) 出願人 591167957

吉川 雄裕

埼玉県川越市南台3丁目7番地10 日本ヘ  
キスト社宅304号

(72) 考案者 吉川 雄裕

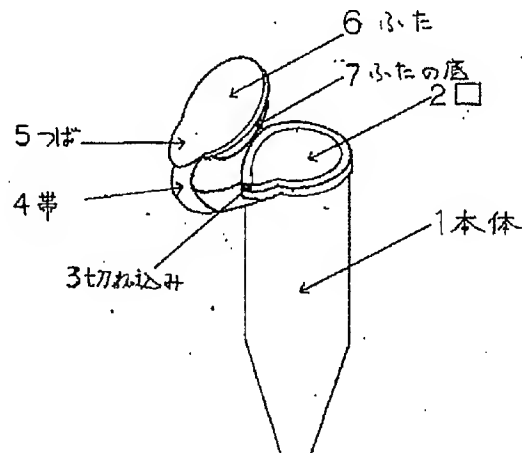
埼玉県川越市南台3丁目7番地10 日本ヘ  
キスト社宅304号

(54) 【考案の名称】 マイクロチューブ

(57) 【要約】

【目的】 マイクロチューブの本体(1)の口  
(2)の片側もしくは両側を窪ませた切れ込み(3)を  
設けることにより、ふた(6)の開閉の際、コンタミを  
引き起こす恐れのないマイクロチューブを提供する。

【構成】 マイクロチューブの本体(1)の口  
(2)の片側もしくは両側を窪ませた切れ込み(3)を  
設ける



1

2

【実用新案登録請求の範囲】

【請求項1】 口の片側もしくは両側を窪ませた切れ込みを設けることを特徴とするマイクロチューブ

【図面の簡単な説明】

【図1】図1は、本考案の一実施例の斜視図である。本体(1)の口(2)の両側に切れ込み(3)を設け、つば(5)の下(4)で本体とつなげる。

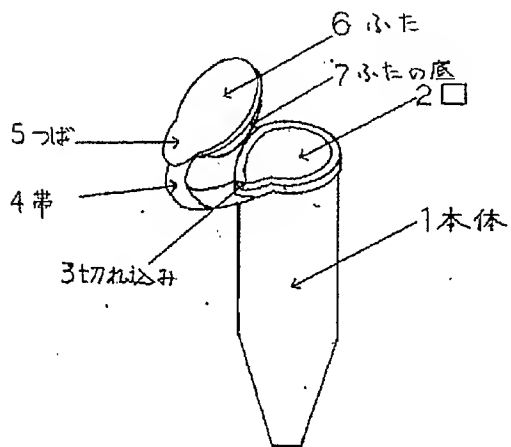
【図2】図2は、従来のマイクロチューブの斜視図である。

\*【0009】

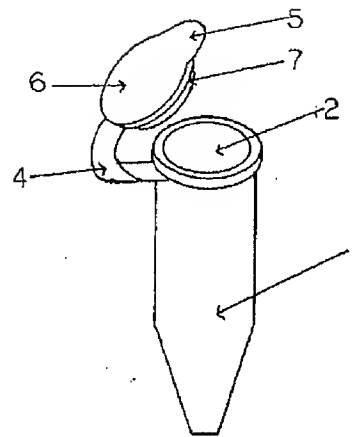
【符号の説明】

- 1 本体
- 2 口
- 3 切れ込み
- 4 帯
- 5 つば
- 6 ふた
- 7 ふたの底

【図1】



【図2】



## 【考案の詳細な説明】

## 【0001】

## 【産業上の利用分野】

この考案は、口の片側もしくは両側を窪ませた切れ込みを設けることを特徴とするマイクロチューブに関するものである。主として理化学分野で利用される。

## 【0002】

## 【従来の技術】

従来、マイクロチューブは、ふた（6）と本体（1）を帯（4）でつなぐ構造からなり、ふた（6）を本体（1）の口（2）にふたの底（7）を押し込むことにより密封し、指でふた（6）のつま（5）をもちあげて開けていた。

## 【0003】

## 【考案が解決しようとする課題】

従来、マイクロチューブとして種々の物が作成されてきたが、主流となっている図1のようなタイプでは片手でふた（6）をあける際、指がふたの底（7）に触れるため、アミノ酸組成分析等の精密分析ではコンタミの原因の一つとなっていた。また、コンタミを恐れるあまり、操作性が低下しがちであった。以上の点から改善が望まれていた。本考案は、これらの欠点を除くためになされたものである。

## 【0004】

## 【課題を解決するための手段】

本考案は、マイクロチューブに口の片側もしくは両側を窪ませた切れ込みを設けることを最も主要な特徴とする。

## 【0005】

## 【作用】

ふた（6）をあける際は、指でふた（6）のつま（5）を下に押す。しめる際は、従来のマイクロチューブと同様、つま（5）もしくはふた（6）の上を持って本体（1）の口（2）にふたの底（7）を押し込む

## 【0006】

## 【実施例】

以下、本考案の実施例について説明する。

本体(1)の口(2)の片側もしくは両側に切れ込み(3)を設け、帯(4)でふた(6)とつなげる。ふた(6)と本体(1)は最初は、別々の部品で使用时に組み合わせて使うようにしても良い。切れ込み(3)は、ふた(6)の開閉に支障がなく、内容物がもれない限り、その大きさ、形状には特に制限を加えない。帯(4)は、ふた(6)の開閉に支障がなく、ふた(6)をあけた時、帯(4)自体がふたの底(7)に触れない限り、その位置、長さには特に制限を設けない。

【0007】

【考案の効果】

以上説明したように本考案のマイクロチューブは、ふた(6)のあける操作が片手で、指がふたの底(7)に触れることなく簡便に行え、コンタミの恐れがなくなり、操作性が向上した。

【0008】